

## [論 文]

唐澤富太郎の文献研究による『教科書の歴史』から  
実物研究による『教育博物館』への内的脱皮

土 井 進\*

## 要 旨

教育学者唐澤富太郎（1911-2004）は、44歳の時にライフワークの一つに数えられる『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』を刊行した。この研究成果が日本人の世代形成を明らかにする上で大きく貢献したので、引き続き世界の教科書研究に取り組んだ。この研究成果を第3回ユネスコ教科書会議で講演した。その後欧米16か国を教育視察した唐澤が、最も強い印象を受けたことは、日本の“もの”を大切にしなければならないということであり、そのために教育博物館を作る必要があると決心したことである。

世界の教科書研究を文献資料による最後の研究とし、それ以後は実物資料による開拓的教育史の研究に大転換して、「遊び・学び・暮らし」に関する実物資料を全国規模で収集し「教育博物館」を建設した。唐澤は、収集した約7万点の実物資料の中から7千点を厳選して、『教育博物館』上巻「日本の児童文化」、中巻「日本の学校文化」、下巻「日本の生活文化」、「解説」の4巻としてまとめ、昭和52（1977）年に刊行した。

『教育博物館』は、『教科書の歴史』の成果を踏まえて時期区分が行われ、156点の教科書の写真のほかに教科書の草稿本や版木、著者の写真などが掲載された。文字解説による『教科書の歴史』に対して、『教育博物館』は写真によって可視化した点が最も大きな発展であった。ここに至るまでの唐澤の苦難に満ちた内的脱皮について考察した。

Key words：唐澤富太郎，教科書の歴史，教育博物館，ユネスコ教科書会議

## I 教科書の時期区分

唐澤は、近代小学校が発足した1872（明治5）年から、1945（昭和20）年に戦前の日本の教育が終焉を迎えるまでの73年間の近代教育史を、教科書の変遷を通して次の8期に明確に時期区分した。これが思想史研究者に対しても影響を与えるところとなり、唐澤は日本教育史学の相対的独立性を示すことになったと自負している。

## ① 翻訳教科書（明治5年～明治12年）

開化啓蒙的性格の教科書

---

\* 淑徳大学人文学部教授

- ② 儒教主義復活の教科書（明治13年～明治18年）  
儒教倫理復活の反動的教科書
- ③ 検定教科書（明治19年～明治36年）  
ナショナリズム育成の教科書
- ④ 国定一期教科書（明治37年～明治42年）  
資本主義興隆期の比較的近代的教科書
- ⑤ 国定二期教科書（明治43年～大正6年）  
家族国家観に基づく帝国主義段階の教科書
- ⑥ 国定三期教科書（大正7年～昭和7年）  
大正デモクラシー期の教科書
- ⑦ 国定四期教科書（昭和8年～昭和15年）  
ファシズム強化の教科書
- ⑧ 国定五期教科書（昭和16年～昭和20年）  
決戦体制下の軍事的教科書

この8期の時期区分（唐澤1956：1）は、『教科書の歴史』はもとより、『教育博物館』中巻「日本の学校文化」においても、教科書の写真収録を分類する際に用いられている。唐澤は『教科書の歴史』の要点を昭和30年に朝日新聞の「ジャパン・クォーター」に英文“Changes in Japanese Education as Revealed in Textbooks”と題して19頁で発表している。（唐澤1975：142）

## II 唐澤の教科書研究の背景と研究の目的

昭和24（1949）年に東京文理科大学・東京高等師範学校・東京体育専門学校・東京農業教育専門学校校の4校の合併により、新制東京教育大学が発足した。これに伴い唐澤富太郎（1911-2004）は奈良女子高等師範学校教授から東京教育大学助教授に補され、兼ねて昭和24年8月31日に東京教育大学東京高等師範学校教授に補された。母校での職務は、梅根悟教授が既に外国教育史講座を開設することになっていたため、唐澤は日本教育史講座を開設し、担当授業科目は日本教育史と教育原理であった。

奈良女高師での7年間の担当授業科目は、教育学と教育原理であった。その授業内容は、奈良での研究生生活が専ら仏教教育思想の研究一筋であったため、「教育の宗教的基礎」、「人生を切り開く主体的真実の探究」、「人間形成の視座からとらえた仏教と教育の研究」などをテーマとした講義であった。日本教育史を通史として講義することは一度もなかった。

そのため日本教育史の授業テキストを準備することが急務となった。この課題に対応して執筆したのが『教師の歴史—教師の生活と倫理—』（昭和30年）、『学生の歴史—学生生活の社会的考察—』（同年）、そして『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』（昭和31年）であった。創

文社から出版されたこの3部作は、授業を構成する3要素である児童生徒、教師、そして教材の3つの観点から日本の近代教育史を究明したものであった。

本稿は、唐澤富太郎が『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』（昭和31年）において究明した研究成果が、その後『教育博物館』（昭和52年）においてどのように発展しているかを明らかにするとともに、研究方法の大転換に伴う唐澤の内的脱皮の苦悩がどのようなものであったか、を明らかにすることを目的としている。

### Ⅲ 『教科書の歴史』と『教育博物館』に見られる研究方法の転換

『教育博物館』（1984（昭和59）年）は、唐澤富太郎の教育学研究の総決算であり、頂点に位置しており、ここに至るまでの教育学研究の歩みは次の6段階として考えられる。

- (1) 幼少期の生活体験と教育学への志
- (2) ドイツ教育哲学の研究（ナトルプ）
- (3) 仏教教育思想の研究（親鸞・道元・日蓮、法華経）
- (4) 日本教育史の研究（教師の歴史、学生の歴史、教科書の歴史、図説教育人物事典）
- (5) 世界の教科書研究（世界の道德教育、教科書と国際理解、世界の理想的人間像）
- (6) 図説日本教育史研究（図説近代百年の教育、図説明治百年の児童史、教育博物館）

『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』（1956（昭和31）年）は、唐澤が44歳のときに、近代日本教育史研究の3部作の一つとして、古い教科書の収集に莫大なエネルギーを投入して執筆した901頁からなる大作である。この力作に対する反響が大きく、日本人の形成を世代ごとに把握することに成功したことに大きな喜びを得た唐澤は、休む間もなく世界の教科書研究の3部作に取り組んだ。この研究の途上でユネスコ教科書会議に招かれて3時間の講演をする機会に恵まれた。講演が終わってから半年をかけて欧米16か国の教育視察をした。この旅行中に感じたことが「教育博物館」建設への動機づけとなり、教育学研究の方法も文献研究から実物研究へと大きく転換することになった。

### Ⅳ 唐澤富太郎の教育学研究の根本精神

唐澤富太郎は、大学紛争のため昭和44年度の入試が中止になり、翌昭和45年度の入学生に次のような講義を行った。

- ①研究には飛躍があってはいけない。すなわち、研究は内からの積み重ねでなければならない。研究というものはいかなる場合にも自己の内的脱皮でない限り真の深まりはない。流行のみを追っていたのでは、ものにならないんだということを繰り返したい。
- ②自分の学説が変わるときには、自分なりに相当苦しむのでなければ研究者とはいえない。変わ

るにしても苦しみ、自己の内から脱皮し、いわば過去を否定的に媒介してのみ正しい発展が考えられる。

- ③流行だけを追っていたのでは何一つものにならない。この点、学問研究には“執念”こそが必要であることを強調したい。(唐澤1970: 237)

このように学生に語り掛けた唐澤の信念は、唐澤の実体験に裏打ちされたものであった。すなわち、唐澤が奈良高師時代に味わった景気のいい友人の活躍をそばで見ながら、あえて仏教教育思想の研究に取り組んだ寂しさと不景気さを忍んで、研究をまとめることができたという確信がバックにあったのである。このような自身の信念に照らし研究方法を文献研究から実物研究に転換したときの苦悩は、想像を絶するものであった。その時の心境を後に唐澤は次のように述懐している。

「日本教育史の研究の方法上の問題で岐路に立ち去就に迷っていた」(唐澤1970: 1) ときに天野貞祐を訪ね、応接間に掲げられていた西田幾多郎の句に出会った。それは、「人は人 われは吾なり とにかくに わが行く道を われは ゆくなり」(唐澤1970: 1) であった。帰路この言葉を何度も何度も口ずさみ、そのおかげで「私は新しい日本教育史、それはだれもがやらないいばらの道であったが実物資料による新しい教育史の開拓への自信が猛然と湧き出たのであった」と(唐澤1970: 1)。

表1「唐澤富太郎の研究方法の大転換」に示したように、唐澤の教育学研究は、篠原助市教授のもとでのナトルプ(1854-1924)(Natorp, Paul Gerhard)の研究から始まり、次いで仏教教育思想の研究、さらに『教科書の歴史』『教師の歴史』『学生の歴史』の近代教育史三部作、そして、世界48カ国の教科書を集めて取り組んだ『世界の道徳教育』『教科書と国際理解』『世界の理想的人間像』の三部作までは、「専ら書物一すじの研究をつづけてきた私にとって、これはしかし大きな冒険であった。」(唐澤1977: 1)しかし、唐澤は止むにやまれぬ覚悟と使命感をもって実物研究に没頭したのであった。

## V 文献資料中心の研究方法から実物資料中心の研究方法への大転換

次の表1は、唐澤の研究方法与主な研究業績をまとめたものである。これから一目瞭然に分かることは、昭和40年代の十年間に研究方法が、文献研究から実物研究に大転換していることである。その背景と唐澤の願いについて次に考察することにした。

表1 唐澤富太郎の研究方法の大転換

西暦（昭和）	年齢	教育の実物資料展示会	主な研究業績	研究方法
1942 (17)	30		『親鸞の人間観・教育観』	文献資料中心の研究
1949 (24)	37		『ナトルプの社会教育学』	
1954 (29)	42		『中世初期仏教教育思想の研究』（学位論文）	
1955 (30)	43		『教師の歴史』『学生の歴史』	
1956 (31)	44		『教科書の歴史』	
1961 (36)	49		『世界の道徳教育』『教科書と国際理解』	
1962 (37)	50		・第3回ユネスコ教科書会議で3時間講演 ・欧米16か国を半年かけて教育視察	
1963 (38)	51		『世界の理想の人間像』	
1966 (41)	54	・名鉄デパート	『図説近代百年の教育』	実物資料中心の研究
1967 (42)	55	・新宿小田急百貨店 ・島根県一畑パーク		
1968 (43)	56	(明治百年)	『図説明治百年の児童史』上下 ・鉄筋3階建ての「教育博物館」を建設	
1972 (47)	60	(教育百年)		
		・大阪三越百貨店 ・町田市大丸デパート ・番町小学校 ・日本橋三越		
1974 (49)	62	・八王子市郷土資料館 ・新潟大和デパート ・銀座松屋		
1977 (52)	65		『教育博物館』上巻「日本の児童文化」 『教育博物館』中巻「日本の学校文化」 『教育博物館』下巻「日本の生活文化」 『教育博物館』解説	
1984 (59)	72		『図説教育人物事典』上中下	

表は筆者作成。

## VI 唐澤富太郎が実物研究を志向した直接的契機と「教育博物館」の建設

唐澤の教育学研究の根本精神については既に述べたのであるが、彼が東京教育大学を定年退官するときに述べた一文も、彼の教育学研究の精神を語るものとして欠かすことができない。すなわち、定年退官の年はまた東京教育大学の閉学の年でもあった。この時に当たり、唐澤は次のように教育学研究の信念を述べている。

「私の教育学研究は、根本資料にとりくみながら単なる実証を越えて教育の精神に迫ろうとすること、学ぶことを通しての過去、現在の人間のふれあいを大切にすること」（唐澤1978：45）

であったという。すなわち「単なる実証を越えて教育の精神に迫」まるところに教育学研究の意義を見出したのであり、ここに唐澤がやむに已まれぬ思いをもって実物研究に突き進んだ淵源があるように思われてならない。

また、真の知識についても唐澤は次のように述べている。

「私の年来の主張は、真の知識というものは、単に抽象的観念的に獲得されたものではなく、実物に直接膚でふれてみて体得したものでなければならないということである。」(唐澤1977: 4)

以上のような教育学研究の精神を母体として、唐澤が実物資料による「教育博物館」を構想するに至った直接的な契機について明らかにすることにしたい。

### 1. 佐渡で日蓮の偉大さにふれ実物にかりたてられる

唐澤が親鸞・道元・日蓮の仏教教育思想の研究に取り組んでいた昭和13(1938)年、東京文理科大学の大学院生時代に、佐渡に渡って日蓮の研究に取り組んだ。唐澤は日蓮が流された寺に泊まり、近くの寺々を訪ねた。そのとき、実物から受けた大きな感激として特に忘れられない思い出があるという。それは「日蓮の肉筆の書簡に接したのであるが、そのとき活字ではとうてい味わえない大きな感動を覚えたのであった。その雄渾な筆蹟、情味あふれる消息に、日蓮の面目躍如たるものがあり、日蓮の偉大さが、さながら電撃のように膚に伝わり、時を忘れて見入ったのであった。この貴重な体験が、私を実物にかりたて、そして私を勇気づけてくれたのである」(唐澤1970: 16)と述べている。これが実物研究への原体験であったと考えられる。

### 2. 欧米16か国の教育視察を通して、日本の“もの”による「教育博物館」を構想

唐澤は、1956(昭和31)年に『教科書の歴史』を著し、日本人のパーソナリティを教科書の分析によって把握することに成功したことを、「いわば宝の鉱脈を発見したほどの感激を覚えた。」(唐澤1975: 134)と喜んだ。そして、日本人のパーソナリティの研究を深めるためには、「もう一度日本人を国際的な場の中にすえてみて、これを巨視的な観点から見なおしてみる必要がある」(唐澤1970: 62)と考えて、世界の教科書研究に取り組んだ。苦心惨憺の末、1961(昭和36)年に『世界の道徳教育』と『教科書と国際理解』を刊行した。このことが高く評価されてユネスコ本部から使いがあり、1962(昭和37)年の第3回ユネスコ教科書会議に招かれ、西ドイツ(当時)の Goslar で講演することになった。会議を終えてから半年にわたって欧米16か国を教育視察し、各国の教科書を集めて帰国した。

唐澤はこの旅行中、はじめはヨーロッパの芸術作品に圧倒されたが、ヨーロッパからアメリカに渡り、「ボストンの美術館を見たとき、再び日本の芸術文化の優秀性と良さを認識し直し」(唐澤1977: 1)、自分に自信を持つことができたという。唐澤が欧米を旅行して、つくづく思ったことは、日本のものを大切にしなければならないということであった。そして、日本こそは東西

文化の統一者たるべき使命を、世界的に担わされていることを自覚しなければならないと思ったという。そして、文化遺産とは「いわゆる芸術品だけでなく、われわれの先祖が日常使った民俗的な物、教育で用いた品物、子どもの作品などを大切にしなければならないということ」を思い付きました。なお特に感じましたことは、私が回ってみた範囲内では、教育博物館とか児童博物館のようなものを見出すことができなかったことであります。これはぜひ日本へ帰ったらやらねばならぬ。日本は狭いから全国を回ってみたところであらうとは思いません。個人の力でやれるだけやってみようと思ひまして、帰国後教育に関する資料、児童に関する資料を集めることに全身心を賭したといっても過言ではないと思います。そしてようやく何万点かを集めることができ、1968（昭和43）年3月、自称、教育博物館を作りました」（唐澤1970：249-250）と述べ、「教育博物館」構想を実現したことを宣言している。

### 3. 実物資料収集にかける執念

帰国後の唐澤の教育資料収集のすさまじさがいかなるものであったかは、「全身心を賭した」と表現されていることから容易に想像できる。当時は高度経済成長期であり、民家の新築に伴って教育で用いた品物や子どもの作品などが全く無造作に廃棄されていく時代であった。唐澤は今のうちに保存しなければ時を失うと考え、「教育博物館」に収蔵する実物資料を鳥取から貨車1台分を買い取ったり、廃品回収業者からリヤカー1台をそのまま買い取ったりというように価値があると考えた実物の購入には金銭を惜しまなかった。寺子屋の資料が見つかった中に、手書き草子を真っ黒になるまで練習し、最後に水書で仕上げた練習帳が見つかった。凡人の目にはただ墨で真っ黒に塗られているだけのもので廃棄されても仕方がないものであったが、唐澤の眼力はこれを寺子屋資料の宝物として後世に遺した。

こうして1962（昭和37）年に帰国し、持ち帰った外国の教科書をもとに翌年、1963（昭和38）年『世界の理想的人間像』（1,261頁）を刊行する大仕事の底流で「日本人の児童・学校・生活文化遺産とおぼしきものを激しい執念をもって収集」（唐澤1977：3）する実物研究が胎動していたのであった。帰国から6年にして「教育博物館」が建設されたことから、唐澤の教育資料の収集活動はいかに執念のなせる業であったか、ということが察せられるのである。

## VII 日本の教科書研究から世界の教科書研究へ

文献研究による『教科書の歴史』は、江戸時代の儒教教科書から戦後の民主主義を強化するための教科書まで、約80年間にわたる全教科を通して、教科書が日本人の形成にどのような影響をもたらしたかを辿ったもので、全901頁の大著となった。本書がライフワークの一つとして刊行されたのは、唐澤が44歳の1956（昭和31）年のことであった。唐澤は、日本人のパーソナリティの形成を教科書分析によって把握することに成功したことに、非常な喜びを感じた。そして、ひ

と休みする間もおしく、日本人のパーソナリティの形成を国際的な場の中にすえて巨視的な観点から見なおすために、世界の教科書研究に取り組んだ。苦心惨憺の末、48か国の教科書を収集し、1961（昭和36）年に『世界の道徳教育』と『教科書と国際理解』を、1963（昭和38）年に『世界の理想的人間像』を刊行した。

この世界の教科書3部作の大作を最後に、唐澤の教育学研究の方法は、文献研究から実物研究へと転換された。実物研究の総仕上げとなった『教育博物館』（1977（昭和52）年）、上巻「日本の児童文化」、中巻「日本の学校文化」、下巻「日本の生活文化」、解説」には、それ以前の文献研究の成果が総動員されるとともに、新しい実物資料も紹介し、内的脱皮を遂げたものとなり、文字通り唐澤の教育学研究の結晶となり、集大成となった。

本講の目的は、文献研究による『教科書の歴史』の成果が、『教育博物館』中巻「日本の学校文化」に、どのように反映されているか、また、『教科書の歴史』にはなかった新しい実物資料が、どのように発展的に取り入れられて内的脱皮が遂げられているかを究明することである。

## Ⅷ 唐澤が究明した教科書と日本人の形成

唐澤が「教科書と日本人の形成」について究明した核心は、『教科書の歴史』の序文に明確に述べられている。すなわち、

①「教科書が日本人を作った。教科書こそは、一部の国民にだけ働きかけたというのではなく、広く一般民衆の一人一人に大きな影響を与えて日本人を形成してきた。特に過去の日本の教育が教科書中心の教育であっただけに、その影響は大きかった。」（唐澤1956：1）そして、教科書の功罪として

②「チョン髻時代の日本を近代的な日本にまで建設して来たものも教科書であれば、また、昭和に至って遂に日本を悲劇のどん底に陥れたのも教科書であったと云って過言でないであろう。」（唐澤1956：1）と述べ、教科書が戦争の悲劇に直結したことを率直に指摘している。

さらに教科書は、誰の手によってどのような意図をもって作られたのかを考えた時、

③「それは国家政策遂行の線に沿って、上から与えられたものに外ならなかったと云わなければならない。これは明治初期の翻訳教科書であれ、また明治37年以後実施するに至った国定教科書であれ、そのいずれも民衆の生活からは極度に遊離したものであることが端的に物語っている。」（唐澤1956：2）では、これ等の教科書は、どのように使用されたのか。

④「日本の教師は、いわばテキストブックの宣教師にさせられていたのではなかったか。…更に重視されなければならないことは、明治政府が教科書に対して絶対不可侵的な価値観を国民に植え付けたところであったと云わなければならない。この教科書絶対視の立場から生徒はひたすらその暗記をさせられたのであって、日本の優等生がいずれもこの教科書をより多く暗記するものであったことは、これらを裏づけさせるものである。すなわち生徒は教科書に「よって」学ん



表2 唐澤による教科書の時期区分と『教科書の歴史』に収録された図版

1	幕藩時代の教科書—東洋文化圏と封建的モラル— 「百姓往来」「消息往来」「女今川」「実語教童子教」「田舎往来」「商売往来」 「東海道往来」（都路往来）「庭訓往来」
2	近代学校の発足と翻訳教科書（M5-12） 開化啓蒙的性格，欧米文化心酔期 「修身論」（M7）「泰西勸善訓蒙」（M4）「智氏家訓」（M8）「西国立志編」（M4） 「単語図第一掛図」（M7）「単語図第三掛図」（師範学校）「第一連語図」 「連語図第八掛図」（文部省，M7）「小学読本」巻一（M6）「万国史略」巻一 「世界商売往来」「西洋事情」（慶応3（1866）年）「世界国尽」（M2） 「地理初歩」（文部省M6）「萬國地誌略」（M8）「訓蒙窮理図解」（M1）
3	儒教主義復活の教科書（M13-18） 自由民権運動への反動的教科書 「小学修身訓」巻三（M14改正）「修身児訓」「幼学綱要」（M15）「婦女鑑」 「小学脩身書」（M16）「小学唱歌集」「教育勅語の草案」（一）（二）
4	検定教科書と国家統制（M19-36） ナショナリズム育成の教科書 「読書入門」（M19）「ハ ハナ」金港堂尋常国語読本 甲種巻一（一）「ハタ タコ コマ マリ」金 港堂尋常国語読本 甲種巻一（二）
5	国定一期教科書（M37-42） 資本主義興盛期の比較的近代的教科書 「イ エ ス シ」国語巻一（M37）「図画教科書」（M37）「初等科地理上」 「初等科国史上」「ナイチンゲール」高等小学修身書一「リンカーン」 高等小学修身書二「ヨイコドモ上」モンブシャウ（修身教科書）
6	国定二期教科書（M43-T6） 家族国家観に基づく帝国主義段階の教科書 「タコ コマ ハト マメ」国語巻一（M43）「図画教科書」（M43）「小学算術上」 「カズノホン二」「尋常小学地理書巻一」「尋常小学国史下巻」「ウソライフナ」尋常小学修身書巻一 「昭憲皇太后」尋常小学修身書巻五 「ワシントン」尋常小学修身書巻三「フランクリン」尋常小学修身書巻六
7	国定三期教科書（T7-S7） 大正デモクラシー期の教科書 「ハト マメ マス ミノ カサ カラカサ」国語巻一（T7）「木口小平」 尋常小学修身書巻一「牛若丸」尋常小学国語読本巻二「二宮金次郎」尋常小学修身書 巻三「尋常小学理科書」（T10）「尋常小学地理書巻一」「尋常小学国史上巻」 「摩天楼」国語読本巻八」
8	国定四期教科書（S8-15） ファシズム抬頭期の臣民教育の強化 「サイタ サイタ サクラガ サイタ」国語巻一（S8）「花咲翁」国語読本巻三 「図画教科書」（S8）「アシタハエンソク」小学国語読本二「靖国神社」 尋常小学修身書巻四「金鶏」尋常小学修身書巻二「国引き」「白兔」（神話教材） 「桃太郎」「サルトカニ」（童話教材）「尋常小学地理巻一」「尋常小学日本歴史巻一」「水平の母」小 学国語読本巻十
9	国定五期教科書（S16-20） 決戦体制下の軍事的教科書 「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」国語巻一（S16）「図画教科書」（S16） 「飛行機と戦車」カズノホン一「桃太郎」ヨミカタ「大東亜地図」初等地理下 「観兵式」ヨイコドモ上」「二重橋」ヨイコドモ上」「太平洋」初等科二 「小学地理」「小学日本歴史一」「ジェンナー」初等科修身一
10	戦後の検定教科書 「土地と生活」など13冊「教科書問題に関する資料」「土地と人間」「社会科10」 （戦後の国定社会科教科書）「占領軍によって墨塗られた教科書」「くのにのあゆみ」 「初等科音楽二」（敗戦直後の仮綴教科書）」

表は筆者作成.

だのでなく、教科書「を」学ばせられたのである。」(唐澤1956: 2-3)

以上の4点に唐澤の教科書研究の核心があると考え、次に901頁にのぼる『教科書の歴史』に収録された教科書の図版は、表2の通りであった。

## Ⅹ 『教育博物館』(1977) に収録された教科書の写真・肖像画・版木

『教育博物館』中巻「日本の学校文化」に収録された教科書の写真は、表3の通りである。教科書は、時期区分に従って1~10に配列されていて、11が世界の教科書となっている。出典は「日本の学校文化」の次のページである。pp.26-33, pp.59-113, pp.141-164, pp.341-344, pp.356-362, pp.391-404, pp.341-344.

唐澤富太郎に師事した筆者は、学部・院生時代を含めて10年間にわたって「教育博物館」に通い、この仕事に携わってきた。約7,000点の実物資料の写真を撮るために、4年間にわたって美術梱包をしてスタジオに運んだ。撮影が終わって返ってきた実物を点検した後、もとの場所に納めることは、筆者の仕事であった。

担当の出版社が決まると、最初の仕事は4冊届けられた束見本を上中下巻に割り振り、中巻の「日本の学校文化」の教科書に関するページをどのように割り付けるか、ということが大きな課題であった。この時唐澤は、たくさんの教科書の中からどれを掲載するかについて、迷うことなく瞬時に判別して割り付けていったのである。文献研究による深い学識が実物研究の上に遺憾なく発揮されているのを目の当たりにした。そして、研究はいかなる場合にも内的脱皮でない限り真の深まりはない、という唐澤の訓えを深く納得したのであった。

表3 『教育博物館』の時期区分のタイトル名と収録された教科書の写真

1	<p><b>往来物一寺子屋の教科書</b></p> <p>「尊圓親王芳跡」(宝暦7(1757)年)「養蚕往来」「名頭字尽」「実語教」  「絵入講釈 実語教雑絵解」「童子教」「番匠往来」「百姓往来」「松島往来」  「改正商売往来」「商売往来」「衣服往来」「隅田川往来」「庭訓往来」  「今川了俊対愚息」「消息往来」「女大学」「女子用往来物のいろいろ」「女実語教」  「大全塵劫記」「ちんこう記」「塵劫記」「改正ちんかうき」「江戸往来」  (折手本、嘉永6(1853)年)「折手本」(下絵つきの手本)</p>
2	<p><b>近代小学校創設期の教科書</b></p> <p>(一) 国語教科書:「ウィルソンリーダー」巻一同上の翻訳「小学読本」巻一(M6)「小学読本」巻一と版木「小学入門」乙号版木</p> <p>(二) 国語掛図:「単語図第一掛図」(M7カラー)「単語図第二掛図」(師範学校)「単語図第三掛図」(同上)「単語図第四掛図」(同上)「単語図第五掛図」(同上)「単語図第七掛図」(同上)「連語図第二掛図」(文部省M7カラー)「連語図第三掛図」(文部省M7)「連語図第五掛図」(同上)「連語図第六掛図」(同上)「連語図第七掛図」(同上)「連語図第八掛図」(同上)「短句図第四掛図」(文学社編M14)「短句図第五掛図」「短句図第八掛図」(同上)「小学指教図第一掛図」(M13)「文部省原版小学指教図」第四(カラー)「同上」第五(カラー)「同上」第六(カラー)</p>

	<p>(三) 翻訳修身教科書：「泰西勸善訓蒙」(M4) 「童蒙をしへ草」初編 (M5) 「修身論」(M7) 「性法略」(M4) 「智氏家訓」(M8) 「西国立志編」(M4)</p> <p>(四) 地理教科書とその版本：「地理初歩」(文部省M6) 「地理初歩」版本「世界国尽」(M2) 「西洋事情」(慶応3 (1866)) 「五洲紀事」(M4) 「萬國地誌略」(M8) 「世界風俗往来」(M5) 「西洋旅案内」(M6再刻) 「世界都路」(M5) 「世界人種相貌全覽」(掛図) 「世界商売往来」(M6) 「続々世界商売往来」(M6) 「世界商売往来補遺」(M6) 「万国通商往来」(M6) 「万国新商売往来」(M6) 「地球儀便覧」(M7)</p> <p>(五) 明治初期地方地誌：「小学教科秋田縣地誌」「福島縣地誌略」「栃木県地誌略」「茨城県管内問答」「小学新潟縣地誌撮要」「信濃國地誌略」「上野國地誌概略」「甲斐地誌略」「埼玉縣地誌略」「東京府地理教授本」「神奈川縣地誌提要」「改正静岡縣誌」「改正愛知縣地理誌」「三重縣地誌略」「山城地理要略」「因幡國地誌略」「鳥取縣管内地誌」「高知縣管内土佐國地誌略」</p> <p>(六) 歴史教科書：「万国史略」卷二の版本 「万国史略」卷一 「万国史略」卷二</p> <p>(七) 明治期地方史：「埼玉縣史談」「小学教科秋田県史話」「福島県郷土史談」「小学愛知縣地理歴史」「甲斐史談」</p> <p>(八) 「小学算術書」と算数掛図：「小学算術書」卷一 (文部省編纂M6) 「大数定位表」(東京師範学校M8) 「除算九九図」(同上) 「減算九九図」(同上) 「神津道太郎肖像」(油絵) 「筆算摘要」卷一 (木版本) 「筆算摘要」卷一 (草稿本) 「統筆算摘要」(代数学木版本) 中村敬字書神津道太郎訳「筆算摘要」「統筆算摘要」卷五 「統筆算摘要」卷五の版本 「統筆算摘要」卷五の草稿本 「尋常小学珠算提要」卷一の草稿本 「統筆算摘要」卷一の草稿本 「啓蒙幾何図式」卷二の草稿本</p> <p>(九) 理科教科書と文部省最初の掛図：「天変地異」(M1) 「訓蒙窮理図解」(M1) 「博物新編訳解」(M1) 「物理階梯」(M5) 「気海観瀾広義」(安政2 (1855)) 「博物図第一掛図」(文部省M6) 「博物図第二掛図」(同上カラー) 「博物図第三掛図」(文部省M6) 「博物図第四掛図」(同上) 「博物図第五掛図」(文部省M11) 「獸類一覽動物第一掛図」(文部省M6) 「鳥類一覽掛図」(文部省M8) 「爬虫魚類一覽動物第三掛図」(文部省M9) 「多節類一覽動物第四掛図」(文部省M10) 「柔軟類多肢類一覽動物第五掛図」(同上)</p>
3	<p><b>儒教主義復活期の修身教科書</b> 「小学修身訓」卷三 (M14改正) 「幼学綱要」(M15) 「孝は百行の本」小学修身書首卷 (M16)</p>
4	<p><b>検定教科書の出現</b> 「てんしさまを たふとむべし」小学修身経卷一 (M27) 「まなべよ まなべよ たゆまず うまざ」読書入門 (M19)</p>
5	<p><b>国定教科書の成立—比較的近代的な国定一期教科書 (資本主義興隆期)</b> 「イ エ ス シ」国語卷一 (M37) 「新聞紙」国語卷八「ワシントン」修身卷三 「ナイチンゲール」高一修身卷一「リンカーン」高一修身卷二</p>
6	<p><b>家族国家倫理に基づく国定二期教科書 (帝国主義)</b> 「ハタ タコ コマ」国語卷一「家の紋」国語卷七「ソッセン ラ タツトベ」修身卷二「天皇陛下勅使」習字 (4学年用) 「ハタ」国語草稿本 (高野辰之本こんにやく版) 「同上訂正活版本」 「高野辰之肖像」「アサガホ ガ サキマシタ」国語草稿本 (こんにやく版) 「同上訂正活版本」</p>
7	<p><b>大正デモクラシー期の国定三期教科書</b> 「ハナ ハト マメ マス ミノ カサ カラカサ」国語卷一「デンデンムシムシ」国語卷一「一休とんち話」国語卷四「五一ぢいさん」国語卷三「アメリカだより」国語卷八「ヨーロッパの旅」国語卷十二「冬の夜」国語卷六「鉢の木」国語卷七「ペン書き草稿本」(高野辰之本) 国語卷八「俵の山」国語卷六「同上のペン書き草稿本」「アメリカだより」国語卷八「同上のペン書き草稿本」「水師營の会見」国語卷九「同上のペン書き草稿本」</p>

8	<b>臣民教育を旨とする国定四期教科書（ファシズム抬頭期）</b> 「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」 国語巻一「国びき」 国語巻三「ニイサンノ入管」 国語巻四「天の岩屋」 国語巻五「源氏物語」 国語巻十一「雪の山」 国語巻十「神武天皇と金のとび」 修身巻二「忠犬ハチ」（同上）「紀元節」（同上）
9	<b>超国家主義の国定五期教科書</b> 「国民学校教科書成立当時における陸軍からの要求一覧表」（部分）「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」 国語巻一「ヨミカタ」（s16）「富士山」 国語巻四「よみかた」「ウサギトカメ」 国語巻二「ヨミカタ」「カズノホン」 算数巻一「ヨイコドモ」上 修身巻一「神国」 初等科国史上「軍神のおもかげ」 初等科修身巻三「宮城前旗の波」 初等科習字二「大東亜」 初等科地理上「隣り組」 初等科図画巻二「ぬもん袋」（同上）
10	<b>戦後の教育</b> 「終戦直後墨塗り教科書」「終戦直後仮綴じ教科書」（「初等科算数」「カズノホン」「初等科音楽」「初等科国語」「初等科地理」「ヨミカタ」）「くこのあゆみ上」文部省（S21）「あたらしい憲法のはなし」文部省（S22）「こくご一」（S22）「まさおのたび」文部省著作教科書（S23）「民主主義」上（S23）「大むかしの人々」（S24）
11	<b>『教育博物館』に収録された世界の教科書の教科名と国名</b> (一) 宗教：イタリア「祈り」3年・イギリス・デンマーク・フィンランド・ギリシャ・ノルウェー (二) 国語：スウェーデン「みなさん読みますか？」・デンマーク「我々と世界」・ノルウェー・フィンランド・コロンビア・スペイン・オーストリア・チェコスロバキア・東ドイツ・西ドイツ・ベルギー・ルーマニア・ポルトガル・レバノン・ブルガリア・トルコ・ソ連 連コルホーズ「国語」1年 (三) 地理：デンマーク・オーストリア・イギリス・フランス・ポルトガル・ノルウェー・ベネズエラ・ギリシャ・スイス・アメリカ Within Our Bordersアメリカ地理（日本の農家） (四) 歴史：デンマーク・ベルギー・アメリカ・イラン・フランス（初級1・2年用） (五) 算数：チェコスロバキア・デンマーク・西ドイツ・アメリカ・スイス・オーストリア・フィンランド・東ドイツ (六) 理科：イギリス・デンマーク・パキスタン「鳥の本」・韓国・トルコ・フランス・ソ連「動物」（6・7年用） (七) 音楽：アメリカ・ソ連・イギリス・西ドイツ

下線のある教科書は、『教科書の歴史』にも図版が掲載されている。  
表は筆者作成。

## X まとめ

『教科書の歴史』（A 5版901頁）に掲載された唐澤収集の教科書の図版は、約100点ありいずれも白黒印刷であった。これらの図版は本文の理解を助けるための補助資料として掲載された。それに対して『教育博物館』中巻（A 4判460頁）には、70頁（内4頁はカラー印刷）にわたって196点の教科書やその版木、そして教科書の草稿本を執筆した人物の肖像画が掲載されている。これは、写真を補助資料としてではなく、写真自身に本質を物語らせようとしたものである。唐澤は、読者自身が実物の写真からその“もの”のもつ“ところ”を看取してほしいと願ったのである。

読者が自分自身の感性で汲み取るという学び方は、唐澤の長年の経験から生まれた“もの”を知るという方法であった。唐澤は、“もの”を通して“ところ”を看取することによって眼力を養ってきたのである。

『教科書の歴史』の研究があったからこそ、世界的な視野から日本の教育に関する実物資料を保存する必要性に気づき、これが契機となって『教育博物館』が誕生したといえよう。ここに唐澤の教科書研究における内的脱皮の実像を見ることができるといえよう。しかも、教科書が『教育博物館』（1977）において写真によって可視化されたことによって、教科書の体裁や概要が容易に見て取れるようになった。ここに文献研究から実物研究への発展を読み取ることができよう。

川本幸民訳『気海観瀾広義』（写真1）（安政2（1855）年）（唐澤1977：104）という理科の教科書があるが、これを書名だけで理科の教科書であると判断することは極めて困難である。しかし、見開きページの写真があることによってなるほどと理解が進むのである。

本書は、「西洋物理学の書として最も重要な青地林宗の『気海観瀾』の遺漏を補って15巻としたものである。」（唐澤1977：318）

また、明治初期の欧米文化心酔期に写真2（唐澤1977：94）のように各県ごとの地方地誌や地方史が盛んに発刊されていたことが、写真を見ることによって一目瞭然と理解できるのである。『信濃国地誌略』は「明治13年発行、長野県が下等小学の教科書として、信濃国の地形、山川の位置および著名な市街温泉物産等の概略をまとめたものである。地名と戸数などは明治10年の調査を基にしている。」（唐澤1977：313）

さらに写真3「世界の算数教科書」（唐澤1977：440）を通して、世界の教科書の様子を窺い知ることができるのである。右の一番上は、チェコスロバキアのものであるが、「ソ連と同様に程度の高い算数教育が行われている。しかも、算数教育の方法も極めてソ連と類似している。」（唐澤1977：504）と、唐澤は『教育博物館』解説に記している。

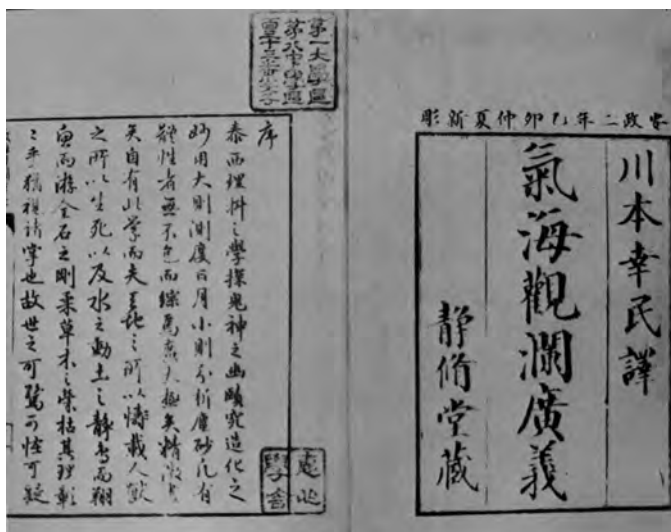


写真1 気海観瀾広義

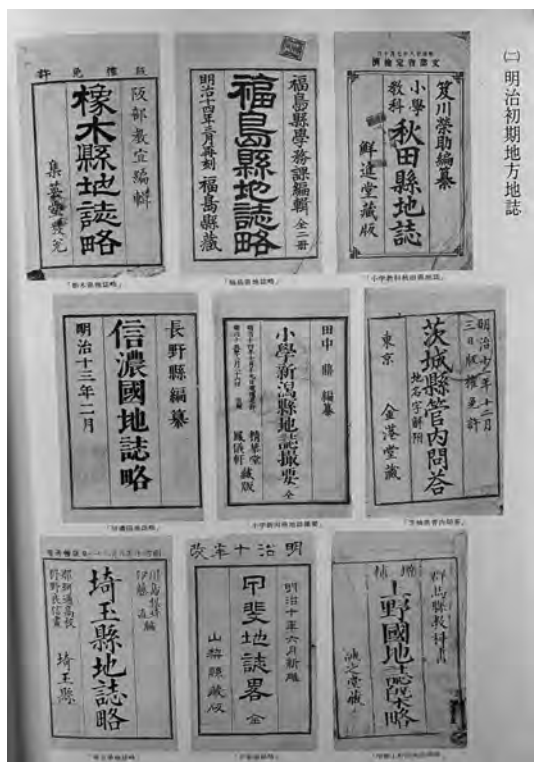


写真2 明治初期地方地誌



写真3 世界の算数教科書

【文献】

- 唐澤富太郎 (1956) 『教科書の歴史—教科書と日本人の形成—』, 創文社.
- 唐澤富太郎 (1970) 『執念—私と教育資料の収集—』, 講談社.
- 唐澤富太郎 (1975) 『教育的真実の探究—研究者の自伝的回想—』, ぎょうせい.
- 唐澤富太郎 (1977) 『教育博物館』中巻「日本の学校文化」, ぎょうせい.
- 唐澤富太郎 (1977) 『教育博物館』解説, ぎょうせい.
- 唐澤富太郎 (1978) 『東京教育大学閉学記念誌—教育学部—』, 東京教育大学.